

臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会 —天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景—

馬場幸栄*

1. はじめに

木村栄（きむらひさし）は明治32年9月から昭和16年4月まで岩手県水沢の臨時緯度観測所長（のち緯度観測所所長）として活躍した世界的天文学者である¹。日本がまだ欧米諸国から科学後進国とみなされていた明治34年に木村は地球の緯度変化を表す式に「Z項」が必要であることを発見し、生前に第一回帝国学士院恩賜賞や英国王立天文学会ゴールドメダル等を受賞したほか、没後もその名が月のクレーターや小惑星に付けられるなどして顕彰されてきた²。

だが、そのような世界的天文学者である木村が臨時緯度観測所の所長時代に「水沢宝生会」という謡曲の会を明治40年代前半の水沢で創設したことはあまり知られていないし、その経緯や背景にもこれまで光は当てられてこなかった。いったいなぜ天文学者・木村栄が水沢宝生会を設立するに至ったのだろうか。木村の生い立ち、水沢での同好の士との出会い、草創期の水沢宝生会と臨時緯度観測所の状況をたどりながら、木村による水沢宝生会設立の歴史を論じたい。

2. 木村栄と宝生流

木村栄と宝生流謡曲の出会いは、木村の幼少期にまで遡る。

木村に関する多数の伝記の種本となっている藤田清正著『木村栄博士』（木村栄博士顕彰会、

1955年）によれば、木村は明治3年9月10日に篠木庄太郎（ささきしょうたろう）の二男として石川県の泉野に生まれた。だが近所に住む親戚の木村民衛（きむらたみえ）・みす夫妻に子どもがいなかったため、翌年には木村家の養子となった。

養父・木村民衛は泉野で「木村塾」という塾を構えており、そこで多くの生徒に読み書き算盤を教えていた。木村栄も明治7年には木村塾で朝6時から夜10時まで英才教育を受けるようになっていた。明治9年頃、学制によって小学校が設立された影響で木村塾は夜間に謡曲、経文、裁縫、手芸を教え始める³。藤田はその謡曲の流派について特に言及していないが、泉野が宝生流を奨励した加賀藩の旧領であることから宝生流だったと考えるのが自然であろう⁴。

こうして木村栄は遅くとも明治9年頃には石川県の泉野で宝生流謡曲に親しむようになっていたと考えられる。

3. 臨時緯度観測所の所長兼技師に就任

成長した木村栄は明治22年に金沢の第四高等中学校を卒業し、東京帝国大学理科大学星学科に入学する。そこで天文学者・寺尾寿（てらおひさし）や地球物理学者・田中館愛橘（たなかだてあいきつ）に師事し、緯度変化や地磁気測定の観測経験を積んでゆく⁵。

国内外の学者たちは当時、緯度変化の観測データから極運動（地球の自転軸が形状軸のまわりを周期的に動き回る現象）を分析することに躍りになっていた。万国測地学協会も「万国緯度観測事

*比較日本学教育研究センター研究協力員・国立民族学博物館

業」という国際プロジェクトを立ち上げ、同一緯度上の6か所で天体観測を行い、その観測結果をポツダムの中央局で分析する計画を立てた⁶。日本も万国緯度観測事業に参加して岩手県の水沢に臨時緯度観測所を設置することが決まったが、列強諸国は日本がまだ科学後進国であると考え、水沢にはドイツ人技師を派遣しようとした。地震学者・大森房吉がそれを阻止したおかげで、水沢での観測は日本人が担当することになった⁷。この、国家の威信をかけた水沢での緯度観測を任されたのが、他にもない木村栄である。明治32年、木村は臨時緯度観測所の初代所長兼技師に任官された⁸。

明治34年にポツダム中央局から水沢の観測精度が低すぎるという思いがけない連絡が入り、木村は窮地に立たされるが、実際には水沢の観測精度が低かったのではなく緯度変化の計算に用いられてきた式に問題があったことに気づいた木村は、その式に「Z項」という新しい項を加えることで地球の緯度変化をより正確に表現できることを発見した。木村は翌明治35年にこの「Z項の発見」を発表して世界の科学者たちを驚かせた⁹。

この学生時代からZ項発見までの期間における木村と宝生流謡曲の結びつきを示す史料は、残念ながらまだ見つかっていない。しかし、Z項の発見から5年以上も経ったある日、木村はある人物との出会いをきっかけに、水沢宝生会を創設することとなる。

4. 當山亮道（とうやますけみち）との出会い

明治40年4月25日、緯度観測所から歩いて5分程の場所にある国幣小社駒形神社に當山亮道が宮司として赴任してきた¹⁰。木村は出張先から緯度観測所へ戻る際には駒形神社で無事帰庁したことを報告する習慣があったため、両者が交流を始めるまでさほど時間はかからなかったろう¹¹。

新潟県新屋敷出身の當山は神宮教、神宮奉齋会、皇典研究所の要職を経て各地の官国幣社宮司を歴

任した人物である¹²。明治政府は当時、国家神道の基盤を整えるため全国に官国幣社を定めてそこへ宮司を派遣していた。當山もそのひとりとして水沢の国幣小社駒形神社に明治40年4月25日から明治43年12月28日まで赴任した。国家から重要な任務を託されて東京から水沢へ赴任してきたという意味では、木村と同じ状況だったと言える。

當山が宝生流謡曲をいつどこで習ったのかは資料が乏しく不明だが、彼の息子や孫たちが宝生流シテ方の能楽師として活躍していることから、當山自身も宝生流謡曲に特別な情熱を傾けていたことは想像に難くない¹³。

木村は當山の水沢赴任中（具体的な年月日は不明）に水沢宝生会を設立すると、その初代会長に就任した。明治維新以降水沢の謡曲文化はすっかり衰退していたが、木村と當山が自ら会員たちを指導しただけでなく、能楽師・瀬尾要（せおかなめ）を指導者として東京から水沢へ招聘したり17世宝生九郎重英（ほうしょうくろうしげふさ）や松本長（まつもとながし）といった謡曲界の要人を招いて素謡会を開催したりしたおかげで、同地の謡曲文化は再興した¹⁴。

當山は次の赴任地へ行くため明治43年末に水沢を去るが、木村はその後も水沢宝生会の活動を続けていった。

5. 水沢の名士たちとの交流

木村が水沢宝生会を立ち上げた直接的なきっかけは流派を同じくする當山との偶然の出会いであったが、草創期の会員構成に注目すると、同会を設立した背景には木村の私人としての謡曲への愛好心だけでなく臨時緯度観測所の所長兼技師としての意思も働いていたと思われる。

水沢には草創期の水沢宝生会会員を撮影した1枚の写真が存在する。その裏面には「水沢宝生会メンバー 明治43年頃」というタイトルとともに会員15名の名前が記されており、当時の水沢宝生会がどのような会員で構成されていたかを知るこ

とができる¹⁵。

写真に納まっている会員たちの当時の職業を『水澤町誌』『水沢市史』『緯度観測所75年誌』で調べてみると、以下のとおりである。木村栄（緯度観測所所長）、當山亮道（駒形神社宮司）、高橋金治（水沢銀行専務取締役）¹⁶、森田（下の名前の記載なし。職業不明）、田代伸平（胆沢郡医師会理事）¹⁷、伊藤徳治郎（緯度観測所所員）、大山貞吉（緯度観測所所員）、吉田富多男（不明）¹⁸、高橋悌三郎（私立水沢英語学会会長）¹⁹、佐藤西蔵（呉服太物屋）²⁰、小野清喜（不明）、佐藤順治（水沢町会議員）²¹、内田紹衛（胆沢郡医師会会長）²²、樋口正典（不明）、菅原正人（不明）。

当時の職業が確認できない者が5名いるが、職業が特定できた10名に関しては、緯度観測所所長・所員3名、駒形神社宮司1名、水沢銀行専務取締役1名、医師2名、私立水沢英語学会会長1名、呉服太物屋1名、水沢町会議員1名で構成されている。不明の5名のうち1名（吉田）も後に水沢町会議員を務めており、草創期水沢宝生会の会員の多くが水沢の名士で占められていたことがわかる。

こうした会員構成からは、水沢出身ではない木村が、職業に関係なく楽しむことができる謡曲の会を通して、水沢の名士たちと親交を深めようとしていたことがうかがえる。

6. 所長兼技師としての木村の苦勞

このように木村が水沢名士たちとの交流を求めた背景には、当時の臨時緯度観測所の厳しい状況が影響していたと考えられる。

緯度観測は国家の威信をかけた事業であったが、明治32年の開設時の職員はわずか6名で、そのうち天体観測を担当できたのは所長兼技師の木村ともう一人の技師である中野徳郎の二名だけだった²³。季節を問わず毎晩、外気との温度差のない小さな観測室で何時間も続けなければならない過酷な観測を彼らは二人だけで行わなければならな

かった。

驚くべきことに、Z項を発見した後も勤務体制の大きな改善は見られなかった。臨時緯度観測所開設から10年経った明治42年の職員数は9名に増えていたが、観測技師の数は変わっていなかった（明治40年に中野徳郎から橋元昌矣に交代。木村は継続）²⁴。

しかも、臨時緯度観測所はその名のとおり臨時の施設だった。もし何らかの理由で万国緯度観測事業が終了すれば、臨時緯度観測所の存在も危うくなる状態にあった。この問題は、大正9年に臨時緯度観測所が常設の「緯度観測所」へと改組されるまで続いていった²⁵。

このように臨時緯度観測所にとって厳しく不安定な状態が続いていた明治40年代前半、木村は水沢宝生会を通して地元水沢の名士たちと交流することで、臨時緯度観測所の所長兼技師として地元の人々の理解と支援を得ようと努めたものと思われる。

7. 結び

木村栄は幼少期に養父・民衛のもとで宝生流謡曲に触れ、臨時緯度観測所の所長兼技師となった水沢で、同好の士である国幣小社駒形神社宮司・當山亮道との邂逅を契機に水沢宝生会を創設し、当地の謡曲文化を再興させた。水沢宝生会草創期の会員の多くを地元の名士たちが占めていることから、同会創立の背景には、臨時緯度観測所の活動を地元の人々に理解・支援してもらいたいという所長兼技師としての木村の思いも働いていたと考えられる。

注

1 明治32年9月に臨時緯度観測所官制が公布され、同年12月より観測が始まる。大正9年10月に緯度観測所官制が公布されて常設の施設となる。緯度観測所編『緯度観測所75周年誌』、緯度観測所、1974年、19頁。

2 「木村栄の人となり」国立天文台水沢VLBI観測所

- 木村栄記念館、<http://www.miz.nao.ac.jp/kimura/content/description/03>（最終閲覧日2016年12月11日）
- 3 藤田清正『木村栄博士』、木村栄博士顕彰会、1955年、1-4頁。
 - 4 加賀藩では5代藩主・前田綱紀から宝生流が保護されるようになった。現在でも旧加賀藩領では宝生流能楽が盛んで、その文化は「加賀宝生」と呼ばれる。特に金沢は「空から謡（うたい）が降る」と言われるほど謡曲が愛好されており、幕末から明治にかけて大量の謡曲注釈書が刊行された。石川県立歴史博物館『能楽 加賀宝生の世界』、石川県立歴史博物館、2001年、2-3頁。
 - 5 『木村栄博士』、11-12頁。
 - 6 観測所は同一緯度（北緯39度8分）上に設置された。水沢（日本）、チャルジュイ（ロシア）、カルロフォルテ（イタリア）、ゲイザースバーグ、シンシナティ、ユカイア（米国）の6か所。緯度観測所編『緯度観測所75周年誌』、緯度観測所、1974年、5-10頁。
 - 7 同上、1-3頁。
 - 8 臨時緯度観測所は文部省直轄の機関として設置された。同上、6頁。
 - 9 同上、6-10頁。
 - 10 松島浅之助『国幣小社駒形神社誌』、国幣小社駒形神社社務所、1930年、127-128頁。
 - 11 千田一幸『科学者木村栄と緯度観測所 三九度八分Nの軌跡「模擬を戒め創造につとめよ」』、特定非営利活動法人イーハトーブ宇宙実践センター、2006年、59頁。
 - 12 「官幣大社平安神宮宮司 當山亮道氏逝く」『皇国時報』第589号、皇国時報発行所、1936年2月1日、14頁。岡田米夫『東京大神宮沿革史』、東京大神宮、1960年、133-136、143-146、163頁。
 - 13 當山亮道の息子である俊道、孫である興道と孝道は、全員宝生流シテ方の能楽師である。調査にご協力くださった當山孝道氏と公益社団法人宝生会に心より感謝を申し上げる。
 - 14 かつて水沢は伊達家に仕えた留守（るす）家の所領だった。そのため、伊達家が保護していた喜多流のほか、高安流や大蔵流を家業とする者が水沢にもいた。しかし明治維新後はそれらの者が家業を捨てたため、水沢における謡曲文化は衰退していった。木村栄を初代会長とする水沢宝生会の誕生とその活動を親子三代で支えつづけた當山家の人々によって謡曲文化が再興した現在は（當山亮道の死後もその遺志を継ぎ、息子と孫である俊道、興道、孝道の三名は東京から水沢に通って謡曲の指導を続けた）、宝生流、喜多流、観世流による合同の謡曲大会が毎年水沢で開催されている。四十年誌発行実行委員会編『胆沢の謡曲 四十年の歩み』、奥州市能楽連盟、2013年、7-10、143-144頁。岩手県胆沢郡水沢町役場編『水澤町誌』、岩手県胆沢郡水沢町役場、1931年、278-279頁。水沢市史編纂委員会編『水沢市史』4近代（Ⅰ）、水沢市史刊行会、1985年、973-975頁。齋藤長男『謡の詩歌 復刻版』、齋藤長男、1995年、4-8頁。
 - 15 この写真は国立天文台名誉教授の大江昌嗣氏に見せていただいた。この場を借りてお礼申し上げます。
 - 16 明治35年より衆議院議員を3回務める。『水澤町誌』、82、215頁。
 - 17 明治40年3月より胆沢郡医師会理事。『水沢市史』4近代（Ⅰ）、1223頁。
 - 18 『水澤町誌』、81頁。大正14年4月から水沢町会議員。
 - 19 大正6年4月から水沢町会議員。大正13年7月から大正14年6月まで水沢町長。『水澤町誌』、79-80、84、172-174頁。
 - 20 大正期には水沢鑄造鉄工株式会社社長。『水沢市史』4近代（Ⅰ）、516、702頁。
 - 21 明治43年4月から大正10年3月まで水沢町会議員。大正10年6月から大正14年6月まで水沢町助役。大正13年3月から昭和3年3月まで水沢自警団団長。『水澤町誌』、78-79、84、192頁。
 - 22 明治31年4月から明治35年3月まで水沢町会議員。明治40年3月より胆沢郡医師会会長。大正9年6月から大正13年4月まで水沢町長。岩手県会議員も務める。『水沢市史』第4巻1223頁。『水澤町誌』、75-76、82、84、172-173頁。
 - 23 明治32年9月22日に公布された臨時緯度観測所官制には所長を含む技師専任2名、技手専任2名、書記専任1名の5名を定員とする。しかし『緯度観測所75周年誌』に記載されている「旧職員在職期間」によると、明治32年12月には木村栄、中野徳郎、平賀孝利、高松勇吉、山本兵三郎、大友修平の6名が勤務している。『緯度観測所75周年誌』、6、120頁。
 - 24 明治42年の職員数は『緯度観測所75周年誌』120頁の「旧職員在職期間」をもとに算出した。
 - 25 大正9年に日本が国際天文学連合に加盟したのをきっかけに、臨時緯度観測所は常設の文部省所属機関「緯度観測所」となった。その後、緯度観測所は東京天文台等と合併改組されて昭和63年に国立天文台が誕生した。『緯度観測所75周年誌』、19頁。